

自ら体を動かして遊ぶことを楽しむ幼児を育てる

第3回 研究部会 講演会・実技研修 令和8年7月15日（水） 会場：城東幼稚園

演題 「子ども一人一人を大切にしたい運動遊びの指導」

講師 もと大阪市立小学校・もと大阪市立幼稚園 校長

【講演会】

子ども一人一人を大切にすることとは、子どもが生き生きと活動する基盤となる。発達段階に応じた主体的に活動できる場、すなわち、子どもたちが自ら体を動かしたくなる環境を整えることが大切である。また、教師は、子どもたちの遊びを通して、どのような基本的動きを身に付けさせたいのかを考えなければならない。子どもたちが興味や関心を持ち、「やってみたい」「挑戦してみたい」という場づくりを工夫することが重要である。

そして、一人一人を大切にすること上で大事なことは、スモールステップで進めることである。「できた」「できない」で判断するのではなく、「ここまでできた」「次はここまでできた」「最終的に全部できた」というように、スモールステップで励ましたり、援助したりして認め、意欲を高めていくことが大切である。ジャングルジムから降りられない、太鼓橋を渡れないなど、恐怖心をもつ子どもでもスモールステップを取り入れることで恐怖心が和らぎ、安全面の配慮にもつながる。一人一人を大切にするための指導は、不易なもので今後も変わっていくことはない。

【教育的意図をもった働きかけや安全面での配慮の例】

○ドッジボール （例）ボールを投げられる子どもだけが投げる

→全員がボールに触れ、参加できるように、コートを増やしたり、人数を調整したりする。

「ボールを2回投げたら、次は友達に譲る」などのルールを子どもと設け、全員が楽しめるようにする。

○鬼遊び （例）いつも同じ子どもがタッチされる

→教師も一緒に「手つなぎ鬼」を楽しんだり、タッチされた子どもも鬼になる「増え鬼」を取り入れたりして、全員が楽しめるよう工夫する。園庭の側溝や遊具は危険なので、逃げる範囲を決めたり、遊具に登ったりくぐったりしないなどの約束を事前に確認することが必要である。

○登り棒 （例）登れるが、降りられない。

→まず手だけでぶら下がることから始め、次に足も使ってぶら下がる、その後は高さを変えてぶら下がる、などスモールステップで進めるとよい。最後は、手を少しずつ緩めながらも、足でしっかり体を支えて降りる方法を知らせていく。幼児の登る目標となる位置にビニールテープを巻くことで、意欲につながるができる。活動前には、登り棒が曲がっていないか、安全確認も忘れずに行う。

【実技研修】

○準備運動（ストレッチ）

- ・様々な体の部位を伸ばす
- ・様々なじゃんけんをする
（足・四つん這い・難易度を上げる）
- ・2人組でバランスゲームをする

○鬼遊び

- ・増え鬼や手つなぎ鬼

○紅白玉を使って遊ぶ ※参照

- ・頭に載せて回る(しゃがんで回る)
- ・上に投げて捕る(投げている間に手を叩く)
- ・片手で上に投げて片手で捕る
- ・上に投げて帽子で受ける(回って帽子で受ける)
- ・上に投げて回って捕る
- ・2人組で幼児の発達段階に沿って玉を投げ合う
- ・壁から反対側の壁に向かって思い切り投げる

○新聞棒を使って遊ぶ

- ・新聞棒を上から落として取る(両手→利き手→反対の手)
- ・2人組で新聞棒を上から落として取る(右手→左手)
- ・2人組で自分の棒を床に立て相手の棒を取る(人数を増やしていく)
- ・2人組でお互いの棒を持ち、押したり引いたりしながらバランスゲームをする
(人数を増やしていく)
- ・やり投げのように新聞棒の真ん中辺りを持って前に投げる
- ・新聞棒の端を持って新聞棒を回しながら前に投げる

○巧技台で遊ぶ

- ・安全面を考慮してマットを用意する
- ・平均台は四つん這いで渡ると難易度も上がる
- ・太鼓橋用の梯子も安全面に考慮して段階的に使うとよい

※発達段階によってボールの投げ方が変わる

＜発達段階を知っておくことも大切＞

前を向いたまま、足は動かさず肘を挙げて玉を耳の横から投げる



正面を向いて足は動かさずに肘を挙げて頭の上から投げる



正面を向いて肘を挙げて投げるが投げる腕と同じ方向の足が前に出る



横を向いて、投げる腕と反対側の足を前に出して投げる



足を上げて振りかぶって玉を投げる

【まとめ】

一人一人を大切にしたい運動遊びとして、安全面に配慮し、子どもたちが体を存分に動かして楽しめる環境を工夫することが大切である。スモールステップで進めることで子どもたちが安心して遊びを進めることができる。また、同じ遊びであっても、ルールや環境、教師の関わり方を工夫することが、一人一人に応じた運動遊びにつながる。

【学んだこと】

一人一人の姿に合わせたスモールステップでの援助が重要であると改めて感じた。教師自身が実際に体を動かしながら遊びを体験することで、動きの難しい部分や不安を感じる場面を知ることができた。さらに、2人組や4人組での活動を通して、一人で遊ぶ楽しさだけでなく、友達と関わりながら遊ぶ面白さを実感した。相手の反応や協力する楽しさを体験したことで、子どもたちが「友達と遊ぶと楽しい」と感じる気持ちに、より共感できた。そして、体を動かす遊びでは安全面への配慮が欠かせないことや、子どもがやってみたいと思う環境の工夫、挑戦する過程を認めること、「楽しい」「もっとやってみたい」と感じられる体験を積み重ねていくことの大切さを改めて学んだ。